

第68回日本体力医学会大会に参加して

2013 : Participated in the 68th Japanese Society of Physical Fitness and Sports Medicine

日向 裕介

Yusuke HINATA

日本体力医学会大会の概要

日本体力医学会は、体力ならびにスポーツ医科学に関する研究の進歩、発展を促進し、研究の連絡協力を図るとともに、その成果の活用をはかることを目的としている。1949年に日本体力医学会が設立されて以来、64年の歳月が流れ、今日では5000人もの会員を擁し、体力医学、スポーツ医科学、健康科学にかかわる研究をリードしてきた。

第68回日本体力医学会大会は、2013年9月21～23日の期間において東京都千代田区の日本教育会館、学術総合センター、共立講堂の3会場にて行われた。今大会のテーマは、高齢社会を重要な課題として捉え、「健やかに生きる～康寧を求めて～」が掲げられた。

3日間の大会内容は、一般口演、大会長講演、特別講演、海外招待講演、国際セッション、都民公開講座、企画シンポジウムといった発表の他に、ワークショップや皇居周りを1周する持久走大会と盛りだくさんの内容であり、初日から最終日まで中身の濃いプログラムが組まれた。

発表について

本学会における一般演題では、発表者の顔が見

え質疑応答が会場内の参加者に分かることなどの利点を考え、口演発表であった。口演時間は、入れ換えと口演で9分間、質疑応答3分間の12分間であった。

口頭発表について、大会2日目に須藤明治教授が「5日間の健康観光がメタボリックシンドローム及びロコモティブシンドロームに及ぼす影響」について報告した。また、須藤明治教授は、大会1日目に組織血流と代謝の領域において座長を務め、6演題とも円滑な進行、活発な質疑応答がなされていた。英語の発表を行った演者に対しても日本語での解説もふまえた丁寧な対応で、発表前の演者の不安そうな顔が発表後には清々しい表情で口演を終えられていたのが強く筆者の印象に残っている。論点の捉え方や進行の技術など、学ぶべきことが多くあった。本大学院に在籍する山田健二さん（スポーツシステム研究科博士課程3年）は、大会2日目に「足把持筋力と足長および足幅との関係」について報告した。近年、注目されている分野だけあり会場に集まった参加者からは多くの質問がなされ、活発な意見交換がなされていた。筆者（スポーツシステム研究科修士課程1年）は、大会2日目に「高校野球選手における競技レベル別の筋量の比較」について報告した。初めての学会発表であったため、直前まで緊張や

不安はあったが、自分の研究と準備してきたことには誇りをもって挑むことを目標にしていたため、筆者なりに堂々と発表ができた。質疑応答では、野球指導者をはじめ、他の分野の研究者の方からも助言やご指導を頂き、自分自身では見えなかった新しい知見を得られた。そこから新たな出会いなども経験でき、今後の研究の発展や意欲に強く影響した。研究内容やきめ細かい発表など未熟な点はまだまだ多くあるが、努力が結果として実を結んだことは今後につながる大きな収穫であった。また、本学会では発表はなかったが、本大学院に在籍する石田洋平さん、佐藤隆太さん、渡邊和久さん（スポーツシステム研究科修士課程2年）も参加し、最先端の研究に触れ、自身の研究の知見を深めることができた。

日本体力医学会大会を終えて

本学会大会で初めての口頭発表を経験し、強く印象に残ったことは自分の研究に誇りと責任をもつことの大切さである。普段の学内の発表などでは、誇りや責任といった意識は芽生えなかった。

しかし、本学会を通じて、自分の研究に取り組むことに対して誇りをもち、多くの研究者の前で発表することに責任をもつ重要性を感じることができた。今後は学内や学外の枠ではなく、常時誇りと責任を強く意識し日々の研究に取り組んでいきたい。また、普段研究者の議論に触れるには文献や論文が中心であったが、本学会では、全国から参加した発表者の活発な議論や質疑応答を目にすることができた。さらに発表者に対して質疑を行うことができ、質疑側の立場も経験できた。あらゆる立場を経験でき、より口頭発表の難しさを痛感する一方で、学会発表の魅力を十分に体感することができた。今後はこの経験を研究分野だけにとどめず幅広く活かしていきたい。

最後に

本学会大会発表にあたり、終始適切な助言を賜り丁寧に指導して下さった須藤明治教授をはじめ、須藤研究室の山田健二さん、大野貴弘さん、石田洋平さん、佐藤隆太さん、渡邊和久さんに心から厚く御礼申し上げたい。



学会会場

右から須藤明治教授、山田健二さん、佐藤隆太さん、日向裕介（筆者）